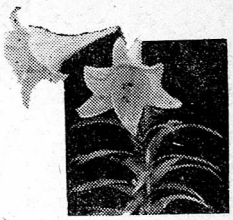


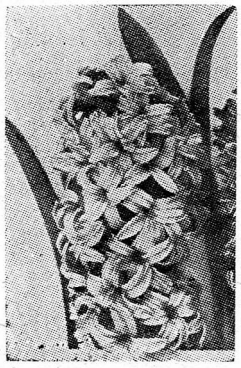
秋植球根あれこれ

原　秀雄

雪が消えるか消えぬ頃ハンノキの花が高い梢で黄色な花を開き、ようやく雪もとけて林の中にナニハヅ、フクジュソウの花が黄に、ウラベニイチゲ（アズマイチゲ）の花が白く薄紅の裏を見せて咲くころになると、庭のハナサフランが紫に白にまたキバナサフランが黄に咲き初め、野山にエンゴサクが咲きキバナノアマナが咲きタンポポが咲く頃ともなれば、庭のヒアシンス、チューリップなど色々の球根類も花を競いコブシ、エゾ紫ツツジ、桜、梅など、次々に春の花を誘う。数ある春の花の中で、球根類の花は誠に華やかなまた可憐な存在である。

園芸上、球根類という一群は地下に塊状、球状などをなす貯蔵器管を具える草本植物で、その貯蔵器管には根が太つた塊根（ダリア）地下の茎が特殊の発育をした塊茎（クロッカス、アネモネ）鱗茎（ユリ類、チューリップ、ヒアシンス）など、色々あつて一様ではない。その中春花を開くものはいずれも秋に植付けを行うので、秋植球根類などとよぶようになつた。秋植球根中、代表的のものは先ずチューリップ、ヒアシンス、水仙類に指を折るが、この他ユリ類、ハナサフラン、シラムスカリ、アネモネ、ラヌンクルス、球根イリスなどといつた数々を挙げることができる。球根類というといずれも花の華美なものばかりを想像させられ勝ちで、チューリップやヒアシンス等からはそのような感じも受けるが、必ずしもそうとは限らない。白い花の楚々たる水仙、空色のフタバシラ（二葉シラScilla bifolia）の可憐な姿などは、決して華美絢爛などという言葉には当らぬ。

さて、球根類は日光のよく当る土地を好むものが多く、水仙、チューリップ、ヒアシンスいずれも同様である。しかし中には半日蔭の場所を好むクロユリ、フタバシラの如きもあり、植込の下草などとするのによい。しかし余り木かげすぎて春先花の咲く頃から全くの日かげになる所では、よい生育従つて花付きは望めない。水仙類など庭木の植込の処々、木の根方に五本、十本あるいは数十株の植付けをすると、ことに広い庭では中々引立つて見えるものである。またスズランも屢々球根類の中に数えられる。これは元来割合に日蔭にも堪えるが、どちらかといえば陽地で水はけよくかつ水分に不足しない土地を好む。植込の根方などに植付けると中々風情がある。本邦自生のものに二型あつて、一つは形が小さく葉は狭くて二枚、一つは葉も花も大きく丈も高く、葉は幅広く二～三枚。スズランは地下に根茎を有する多年草で、宿根草として取扱わるべき植物であるが、根茎に生ずる芽をピップといつて一種の球根扱をされている。安政六年三月の写本、四季草花名寄花形附というのに君懸草とあり、本草正偽（安永五年）に八千代草、鈴蘭の名がある。株がよく茂らぬと花を持たぬが、欧洲から来たいわゆるドイツスズランは花つきがよく、日本のスズランより葉の色が濃く、円味と光沢とがある。白井光太郎博士によると、チューリップは文久の末米国より渡来したという。またヒアシンスは小アジア、南欧などの原産、徳川末期の弘化二年の異国草木会目録にこの名のある所から見ると、わが国にはそれより少し前に渡来したものであろう。草木名寄にヒヤシントウ一名長寿花とあるものは今日のヒアシンスではなく、黄水仙であるという。花壇に植込で華麗な花容を楽しむには、やはりチューリップ、ヒアシンスを最とし、またラッパ水仙などいずれも春の花壇にふさわしいものである。



シヤシンス

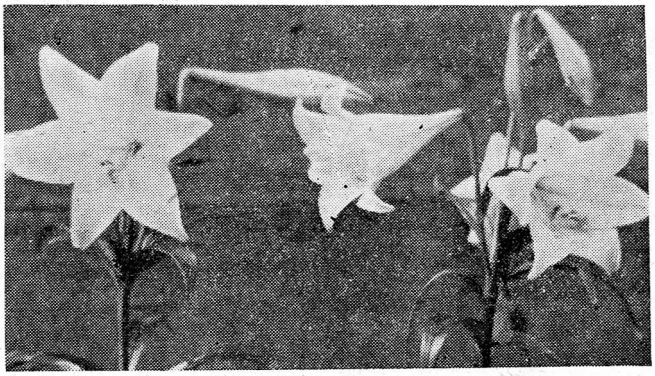
サフランは文久の末始めて生苗が外国から輸入され、ハナサフランは明治初年、キバナサフランは大正初年渡来した。

早春の野山の林間をかざるカタクリも一種の鱗茎を有し、植込の下草として面白いものだが、これは古くよりわれわれの祖先に知られ、万葉集にはカタカゴの名で歌となり、この他カタコユリ、ブンダイユリ、初百合の名がある。二枚の葉を開き、とき色の割合大きな花を五寸ほどの茎の先に一つつけた姿は甚だ愛すべく、このような植物も園裡に盛んにとり入れて培養品の多く出ることを望むものである。片栗粉はこの鱗茎の澱粉を精製したものであるが、今では多くジャガイモのそれが片栗粉の名で罷通つている。シラには色々の種類があつて春早くから主に碧色の小さい花を一穂に多数つけ、春早く咲く前記のフタバシラを初めとして、晩いものでは六月初め頃まで花のあるヒアシンスシラ（Scilla hyacinthoides）まで色々の種類があり、いずれも明治、大正時代に渡来し、ことにフタバシラは一度植付けるとその後は種子で自然に殖えるほどに丈夫で、肥料の植えかえのと心配もいらぬこと丁度春早く林間に咲くエンゴサクやキバナノアマナなどとその丈夫さを競うものである。これにはわが国に野生の種類にツルボ（サンダイガサ、スベラ、ズイヘラ、スルボ、ウシビル、スミレ）というのがある。この名のスとかツとかは酸で、酸味、ヘラ、ミレ、ビルという語尾はミラすなわちニラの意との説がある。葉は春二枚を立て、夏枯れて秋また二葉を出し、花は小さく、秋のはじめ尺余の花茎の梢に三、四寸の穂をなし、薄紫紅色。これも樹間に植付け

て面白いと思うが、園にとり入れられたことは稀であろう。

ユリの類はわが国に多くの種類を自生し、古事記に山由理（ヤマユリ）また佐韋（サイ）のことが見え、万葉集には姫ユリの和歌があり、古くより人々に親しまれたことがわかる。徳川時代の園芸書、花壇綱目に四十五品、花壇地綿抄に三十七品の記載がある。本道には海岸の草地、疏林内にエゾスカシを見るが、花壇地錦抄に『ゑぞゆり』とあるのは恐らくこのユリのことと思う。また山地の林内にはクルマユリが赤く咲き、ヤマユリは道南から本州に、その他オニユリ、コオニユリなどよく見る。テッポウユリは南地の産ながら本道でも栽培され、戦前わが国輸出園芸品の大宗であつたが、戦時中これに代る品種が米国にできたため、輸出が振わなくなつたことは人の知る所である。またカノコユリも屢々問題になる種類で、ことに白花のシロカノコは輸出向の品として今後に期待を持たれる百合の一つである。

クルマ、カノコ、オニなどの各種も花壇地錦抄に見られ、また同書の『百合のるひ』の中に『こくりゆり』があり『花色くろきやうに光り有りるり色に見ゆる』とあつて、こくゆりは黒百合すなわちクロユリであろう。前記の写本四季草花名寄にも黒百合があり、記文に『葉形車座、花形黒にて少しるり色下り咲見事』とあつて、徳川時代にはすでに多少は苑裡にとり入れられていたものと考えられる。尤も淀君にまつわる黒百合のものがたりなども伝えられる所から見ると、かなり古くから云々されていたことが想われる。また姥百合のことも古く花壇綱目に見えるが、本道に自生のものはエゾウバユリ一名大姥ユリで形は大きく花つきもよい。半日蔭の植物であるが、花が咲くとあとには子株三、四を残して元の株は枯れ、子株は開花までに二、三年を要し、ユリとはいささか趣を異にする。百合ことにオニユリ、コオニユリなどは鱗茎を食用とするが、えぞ姥百合、黒百合も同様食用となり、昔アイヌの主要な澱粉食糧で、姥百合から採つた澱粉は質がよい。



鐵砲百合

話が花より園子になりそうだから元にもどして、秋植球根類は球根を秋に植付けるが、その時季は八月末頃から十月一杯ぐらい、できれば九月中には植付けるようにしたい。この秋植球根類を春花の時季に急に植付けようと志す人がすくなくない。一体野生植物を園裡に移す場合など花の時に採ることがしばしばあり、一、二年作る内に勢をもり返して何とか旧の生育をとりもどすのであるが、このような移植は栽培植物では採るべきではなく、正常な生育をさせるためには、やはり正常な時季に植付けをせねばならぬ。チューリップ、ヒアシンス、水仙類、花サフランなどは四年も五年も植えたまま置くと、土地の肥料分も不足し、かつ球根が分裂して小さくなり、花つきも悪くなるので、土質によつても多少異るが、少くとも三年または四年に一度は球根の掘上移植を行う必要がある。掘上げは地上の茎葉が衰えて黄色になつてからがよく、大体ヒアシンス、チューリップで六月下旬、花サフランは上旬、水仙類は七月中旬頃、ユリ類は種類により異なるが概ね十月である。葉が枯れてからそのままにしておくと根を発生し、それを掘上げると貯蔵物質を徒費することになり、後の生育をある程度害することになる。チューリップ、ヒアシンスなどは掘上げて直ちに日蔭で干して土を落し、風通しのよい所に植付けまで貯える。百合の鱗茎はしなびぬようやや湿つた鋸屑の中に貯える必要がある。

球根類を植付ける土地は種類毎に多少の差はあるが、一般に排水のよい、腐植質に富んだ肥えた壌土といえる。粘質土では病害を受け易く、砂質土では球のしまりが足らぬことが多い。植付けの場所はよく耕して植孔または植畦を作り、堆肥などを十分に施して床を予め作り植付けることが種類により株間、深さ（土表から球根の頂端までの土の深さ）を加減する必要がある。例えばハナサフランは深さ株間とも一寸五分～二寸五分、ユリ類は種類により多少異なるが深さ三、四寸株間五寸ぐらい、ムスカリは球の大きさにより深さ一寸五分～三寸、株間一寸～三寸ぐらい、スズランはピップの株間二～二寸五分、深さは芽のかくれる程度、ヒアシンスは深さ三寸、株間六、七寸、チューリップは深さ三寸、株間五寸ぐらい、水仙類は小形の球では深さ二寸五分、株間同、大球では深さ二寸五分～三寸、株間三～五寸ぐらいを適当とする。

ユリの類は他のものと少し違つて、鱗茎の下からのみならず鱗茎から出た地上茎の基部からも盛に根を生ずるから肥料は鱗茎より上にも施した方が合理的といえる。庭などにエゾスカシやオニユリを植付けた場合、株のまわりに落葉、堆肥、油粕などを敷くと、植かえをあまり行わないでも年毎に花を楽しむことができる。

秋植球根類は植付けてしばらくすると寒さを迎えることとなり、土質によりまたその年の天候により、例えば雪が晩くまで降らぬようなことがあると霜柱が立つて、植付の浅すぎたしかも植付の晩かつた球根など地上に押上げられることがあるから、晩く植付ける場合には植込の深さをやや深目にし、また地表に藁などを敷いて、霜柱の立つことを防ぐようにしたい。一九五四、七月稿

（北海道大學理學部・文部教官）